

# (一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第85号 (2017年5月19日)

## 定例研究会のご案内

東洋音楽学会西日本支部 第276回定例研究会

(日本音楽学会西日本支部例会と合同開催)

日時: 2017年6月10日(土) 13:30~

場所: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館 S4教室

(地下鉄烏丸線「今出川」駅徒歩1分、京阪電車「出町柳」駅徒歩15分、バス停「烏丸今出川」徒歩1分)

例会担当: 梶丸 岳 (京都大学)

《博士論文発表》

ヒンドゥスターニー音楽の成立

ーペルシャ語音楽書からみる北インド音楽文化の変容ー

井上 春緒 (京都大学)

《小泉文夫音楽賞受賞記念講演》

司会: 中川 真

1. “Keeping Music at the Core of a Culturally Conscious Pedagogy”

パトリシア=シーアン・キャンベル (ワシントン大学)

2. 「東アジアとオーストラリアの音楽と近代: 芸術歌曲を事例にして」

時田 アリソン (京都市立芸術大学)

\* \* \* \* \*

## 定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第274回定例研究会

日 時：2016年10月16日（日）13:30～17:00

場 所：京都教育大学（藤森学舎）

2号館1階D1講義室

例会担当：仲 万美子（同志社女子大学）

劉 麟玉（奈良教育大学）

### 《特別講演》

《ラビンドラナート・タゴール訪日100周年特別公演》

“Uniqueness of Tagore Music”

Dr. サテナラヤン バッタチャリヤ（ヴィシュワ・バーラティ大学）

コメンテーター：田中 多佳子（京都教育大学）

### 〈報告〉

ラビンドラナート・タゴール(1861-1941) [ベンガル語発音でロビンドロナト・タクル]は、アジア人初のノーベル賞を受賞し、インド国歌も作曲し、学校も建設した、インドの偉大な詩人であり思想家である。タゴール家は彼の祖父の代に、イギリス植民地下でその拠点の都市コルカタで商人として成功して巨万の富を築き、代々多くのインド・エリートを輩出してきた。しかし、七人兄弟の末子として生まれたラビンドラナートは、イギリス式の教育になじめず、荒野であったコルカタ郊外のシャンティニケトンに植林しながら、1901年にインドそしてベンガル文化を核とする理想の教育を実現させるべく独自の大学を創設した。今日、それはヴィシュヴァ・バーラティ国立大学となり、さらに多くの学

校が建設されて、シャンティニケトンは子どもから大人まで学ぶ人々が集う、森の中の学園都市となった。

前置きが長くなったが、講師のS. バッタチャールヤ[ボッタチャルジョ]博士(教育学)は、現在その大学の運営に携わり、タゴールに心酔し、タゴールの教育観・音楽観を知り尽くす人物である。と同時に、今回は英語での講演だったが、日本留学経験もあり日本語教師を務めたこともある日本通でもある。タゴール自身、一時期は日本文化に傾倒し、多くの日本の文化人をシャンティニケトンに招いたり、自ら何度も来日したりしている。バッタチャールヤ博士は、2016年がタゴールの初めて神戸に来日してからちょうど100周年になることを記念して関西に来日された。したがって、音楽は博士の専門ではないが、この機会に、是非、タゴールの音楽観について話していただきたいと依頼してこの講演が実現した。

タゴールは、南北のインド古典音楽やヒンドゥーの宗教音楽など汎インド的な伝統音楽に加え、地元ベンガル地方の民謡や、付近の少数民族サンタル族の音楽をこよなく愛して研究し、自分の学校に全国から優秀な音楽家を教師として招いた。また、自分の詩や随筆・戯曲に、それらの音楽や舞踊的特徴をちりばめた独自の音楽ジャンルを作りあげ、「ラビーンドラ・サンギート(音楽)」と総称されるようになった。タゴールが、これらを積極的に学園の生徒たちに上演させたのは、イギリス植民地化でこのような学園に政府から資金的援助が得られなかったためでもあるという。「タゴール・ソング」と呼ばれる歌曲は2230曲におよび、内容的には、①祈り ②愛 ③自然 ④インド民族 ⑤夏 ⑥雨季 ⑦秋 ⑧晩秋 ⑨冬 ⑩春、の10に分けられ、今日でもベンガル人の心の拠り所として愛され続けている。博士は、各々のタゴールソングの例や、今日学園の行事で歌われる歌、彼の作曲したインド国歌とバングラデシュ国歌などを、CDや実演で次々と紹介された。特に日本ではまず無い貴重な機会であったが、観客がほとんど例会関係者のみであったことは残念であった。

(田中 多佳子 記)

\* \* \* \* \*

《修士論文発表》

明治撰定譜筆策譜の旋律パターンについての一考察—MGDP手法を用いた分析の可能性

竹下 秋雄 (九州大学)

《博士論文発表》

猿倉人形の成立・活動・上演様式—近代日本の地方における大衆文化の生成

藪田 郁 (アジア太平洋無形文化遺産研究センター)

(※修士論文、博士論文の報告は次号に掲載いたします)

\* \* \* \* \*

東洋音楽学会西日本支部 第275回定例研究会

(※中京大学文化科学研究所・正調名古屋甚句保存会・あなたのお役に、サポート・プラス との共同主催)

日 時：2017年3月9日(木) 18:00～20:00

場 所：中京大学清明ホール

名古屋キャンパス1号館3階

例会担当：明木 茂夫 (中京大学)

《大衆歌謡の世界—甚句をめぐる》

講演：深谷 大 (早稲田大学演劇博物館・中京大学文化科学研究所、非会員)

実演：正調名古屋甚句保存会

〈報告〉

西日本支部3月例会は「大衆歌謡の世界—甚句をめぐって」と題して3月9日(木)18時より中京大学名古屋キャンパス(名古屋市昭和区)清明ホールにて開催された。講演に先立って、まず正調名古屋甚句保存会の諸氏による「名古屋甚句」実演が披露され、それに続いてメインの講演、早稲田大学演劇博物館招聘研究員/中京大学文化科学研究所準所員の深谷大(ふかやだい)氏による「甚句という歌謡—甚句から甚九へ」が行われた。講師の深谷氏は東京都生まれ。早稲田大学大学院博士後期課程修了、博士(文学)。専攻は日本の芸能と文化。中京大学、愛知淑徳大学、栄・中日文化センターなどで講師を務める。主要著書・論文に、『岩佐又兵衛風絵巻群と古浄瑠璃』(ぺりかん社、2011年)、「名古屋甚句と綾渡の盆踊」(「名古屋芸能文化」25号、2015年)などがある。氏の講演の内容は次のとおりである。

「甚句」という歌謡は〇〇甚句や相撲甚句など、名古屋だけにとどまらず、各地でご当地ソングとして歌われている。その起源は十八世紀前半に遡ると考えられるが、「甚句」が元来どんな歌謡であったのかは、未だによくわかっていないというのが現状であろう。本講演ではまず、甚句の名称の起源が人名に由来することを示し、その上で、なぜ人名に由来するのか、甚句ゆかりの人物とはどのような人であるのかについて、諸種の文献によってたどりつつ、甚句のルーツを探った。

結論としては、「ふびやの甚九(郎)」という長崎の小間物屋の息子が、大坂で呉服商となって成功し、大坂で遊女と浮名を流して、最後は長崎に戻る、という物語に由来するものである。物語の主人公・甚九(郎)の出世譚に節を付けて歌ったことが始まりであった。従って「甚句」ではなく、本来は「甚九」が正しいということになる。実際、現存する、江戸時代から明治前期の「甚九節」の歌詞集はすべて「甚九」と記しており、また歌舞伎台帳や、滑稽本など江戸時代の小説類においてもやはり「甚九」と表記されている。「甚句」という現在の表記になったのは後になって、おそらく明治末期か大正年間であろうと考えられる。

「甚九」と同様に、物語の主人公の名前が歌謡や芸能の名称になる代表的な例としては「浄瑠璃」があげられよう。「浄瑠璃」は主人公・浄瑠璃姫(御

前) の人名に由来する語り物芸能で、人形浄瑠璃文楽の原点である。同様のことが「甚句」についても言えるということが、諸種の文献を通して本講演で明らかになった最も重要な点である。「ゑびやの甚九(郎)」のことを歌った歌が、最初はゑびや節として大坂でヒットし、その影響下に甚九(郎)節が兵庫を中心に歌われ、全国に広まっていったと考えられるのである。

(明木 茂夫 記)

\* \* \* \* \*

#### ■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付

TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp

---

### 支部だより 第85号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：武内 恵美子、出口 実紀

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付

TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp